



VOL.5 NO.1  
(通巻8号)

日本免疫学会会報  
The Japanese Society for Immunology Newsletter

# JSI Newsletter

## 日本免疫学会会長就任にあたって

谷口 克 ● 千葉大学医学部附属高次機能制御研究センター

このたび第10代日本免疫学会会長に推挙いただきましたことは、身に余る光栄であるばかりでなく、その責任の重さを痛感している次第であります。

ご存知のように日本免疫学会は創立以来27年を迎え、ヒトの一生にたとえるなら最も活力に満ちあふれた青年期にあります。その間、日本免疫学会は絶えず卓越した業績をあげて世界の免疫学をリードし、次々に新しい人材を発掘して世に送りだし、生命科学の発展に寄与し続けています。

1960年代に黎明期を迎えた近代免疫学は、1980年代に至り分子生物学の進展によって飛躍的に進歩しました。とくにDNAが種属共通語として語られるようになってからは、免疫学は生体防御機構を解明する学問としてばかりでなく生命現象を解明する中心的な学問領域となり、これまでの一領域の学問から生命現象の一つのプロトタイプを見いだす学問として注目されるようになっていきます。それは、免疫・造血系が体細胞の中で唯一多分化能をもつシステムであるため、生命体の根幹である“細胞分化の決定”や“分化発生のプログラム”を研究することに最適であるからに他なりません。また多細胞生物学が有機的機能体として機能するための研究、ヒトの統合的機能に関する研究は今後脳機能を中心に進められようとしています。免疫系のもつ統合機能、システム機能は、それらの問題を解明する重要なヒントを与えるものと考えられます。これらの問題を解決するための基盤技術として登場してきた胚工学技術は、次世代の生命科学研究の潮流を作りつつあります。

さらにこれらの技術革新は学問研究を進める上での考え方も変えようとしています。すなわち、これまでの研究の多くが予想、予見に基づき、それを演繹的に実証

することでしか意味のある結論を得られなかったのに対して、得られた結果の中から真実を帰納していく帰納法的研究によって新しい生命現象、生命観が生まれてくる可能性があります。これらの可能性の素地ができた点で、21世紀の生命科学は大宇宙的な発見の予感を感じさせるものと興奮しているのは私一人ではありません。

日本の免疫学研究がこのような研究環境の変化にも十分対応でき、率先して世界をリードできるのは日本免疫学会がいつまでも若いエネルギーを結集する力を持ち続けているからに他なりません。私はそのエネルギーを生み出す元は、多様性とそれを許容する体質、すなわち柔軟性にあると思っています。組織体としても、それを構成する会員一人ひとりがその自覚をもって、多様性と柔軟性を大切に育ててゆく必要があります。単調で変化に乏しいが安心できる「白」も良いが、複雑でさまざまな顔をもつ「赤」も、さらに「赤」の中でも比較的期待値が予想できる「ホルダー」も良いが、変化に富んで、著しい多様性のある「ブルゴーニュ」もレバトアに加える余裕が重要です。

21世紀を目前に控えたいま、我々会員が将来へ進む最も重要な精神的基盤は、多様性と柔軟性を尊び、それを許容するシステムを作り上げることであると思います。今後二年間、会員の皆様とともに将来に飛躍できる基盤を築き上げていきたいと考えています。